

研究・調査報告書

報告書番号	担当
170	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
The impact of acute alcoholic hepatitis in the explanted recipient liver on outcome after liver transplantation. 肝移植後のアウトカムにおけるレシピエントの移植肝の急性アルコール肝炎の重要性	
執筆者	
Wells JT, Said A, Agni R, Tome S, Hughes S, Dureja P, Lucey MR.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Liver Transpl. 2007 Dec;13(12):1728-35.	
キーワード	
急性アルコール肝炎、組織学的所見、肝移植、禁酒期間、移植肝の生着率	
要旨	
<p>目的：臨床的な急性アルコール肝炎（AAH）の患者は通常の肝移植（OLT）に適合した候補者とは考えられない。しかし、AAHに類似した組織学的所見は移植時の移植肝によく見られる。このような所見の重要性は、患者と移植肝の予後を示すマーカーとしてはまだ確立されていない。我々の目的は、アルコール性肝障害（ALD）の患者に移植された肝臓の組織レベルのAAHの所見を評価し、これらと患者や移植片のアウトカムとを関連つけることである。</p> <p>方法：我々は組織学的なAAHを有するまたは有さない患者と、非ALDのために肝移植を受けた患者とを比較した。</p> <p>結果：1,097人の肝移植のレシピエントのうち、148人がALDであり、125人がALD患者とよく似た特性を持つ非ALDの対照とした患者である。148人のALD患者のうち32人は組織学的AAHを有しており、116人が無症候性肝硬変（BAC）であった。ALD患者のうち28%は禁酒期間が6ヶ月未満であったし、54%は禁酒期間が12ヶ月未満であった。組織学的AAHの存在と12ヶ月未満の禁酒期間には統計学的に有意な関連があった（$p=0.009$）が、6ヶ月未満の禁酒期間とは関連は認められなかった。また、ALDの患者と非ALDの患者の間では、移植後患者と移植片の生着については統計学的有意差を認めなかった（$p=0.53$）。さらに、組織学的にAAHを有するALD患者とBACを有するALD患者の比較でも、移植後患者と移植片の生着は同様の結果であった（各$p=0.13$と0.11）。ALD患者における移植後の再発率は16%であった。しかし、これはコントロールと比べて、移植片の喪失率の増加や生存率の減少を招いたりしなかった。組織学的AAHを有する患者とBACを有する患者の間に、移植後再発について違いは認めなかった（$p=0.13$）。多変量解析の結果、患者や移植片の生着には、移植前の禁酒や移植後の再発は影響しなかった。</p> <p>結論：移植片における組織学的アルコール肝炎は、再発や肝移植のレシピエントの生存や移植片の生着というアウトカムにおいては予後不良を示す因子ではなかった。肝臓の組織像を、アルコール性の患者がOLTに適合した候補者となるかどうかを識別するのに用いるべきではないことに注意すべきである。</p>	